

一
次の文章は、昭和十二年の東京を舞台にした小説の一節です。読んで、あとの問いに答えなさい。

門倉修造は風呂を沸かしていた。

長いすねを二つ折りにして焚き口にしゃがみ込み、真新しい渋うちわと火吹竹を器用に使っているが、そのいでたちはどうみても風呂焚きには不似合いだった。三つ揃いはいこの間銀座の英國屋から届いたものだし、ネクタイも光る石の入ったカフス釦も、この日のために吟味した品だった。

小使いの大友が、

「社長」

と何度も風呂場の戸を開け、自分が替りますと声をかけたが、そのたびに門倉はいんだと手を振った。

「風呂焚きはおれがやりたいんだよ」

あいつが帰ってくる。親友の水田仙吉が三年ぶりで四国の高松から東京へ帰ってくる。長旅の疲れをいやす最初の風呂は、どうしても自分で沸かしてやりたかった。今までもそうして来た。

サビ落しの灼ける匂いがきつくなかった。新しいブリキの煙突にはじめて熱い煙が廻るとき匂いである。新しいのは煙突だけではなかった。借家だから、家だけではどうにもならなかったが、櫓の風呂桶も流しの簀の子も、新しい木の匂いをさせていた。

門倉は門倉金属の社長である。年はあと厄の四十三だが、あと厄どころかこのところアルマイトの流行に乗って急激にふくれ上り、社員も三百人を越して景氣がいい。新聞は軍縮軍縮と騒いでいるが、支那も欧州もアキナ臭いし、軍需景氣はこれからというのが大方の見通しらしい。注文は坐っているところがり込んで来たが、門倉はこの半年ほど仕事は二の次だった。

水田仙吉から言ってきた社宅手当の金額は月三十円である。これで手頃な借家を探さなくてはならなかった。あと五円あればと思うが、中どころの製薬会社の地方支店長からや々と本社の部長に栄転した仙吉は、門倉と違ってつましい月給暮しである。贅沢はいえなかった。何軒も見て廻り、結局自分の家にも近い芝白金三光町のここに決めたのである。仙吉のところには間取りもなにも知らせなかった。二十年あまりのつきあいだが、仙吉が地方に出ては東京に舞いもどるたびに、門倉は社宅探しをやって来た。仙吉は安心して任せていた。

借家が見つかったと、それからが門倉の楽しみだった。まず大家に大きな菓子折を届けて挨拶する。畳を入れ替えるのは大家持ちだが、植木を入れたり垣根のつくろいは、門倉が金にへーⅠーをつけずにやった。小使いの大友夫婦に心付けをはずみ、台所の灰汁洗いや、

当座の所帯道具を調える手伝いをさせた。万一、^{*1}チッキの着くのが遅れても、一日二日不自由はないようにして置くのである。

門倉がシャボンと湯上りタオルをたしかめ、大友を呼んで便所に紙は入っているだろうなどとなった時、魚屋が来た。頼んでおいた栄転祝いのへⅡが届いたのである。門倉は腕時計を見た。水田一家が東京駅から^{*2}円タクに乗り込んだ頃あいである。こんどはどういう趣向で出迎えようか。門倉にとってこの三年は、^①今日このときのためにあつたようなものだった。

「水田仙吉」の表札を見つけたのは、女房のたみだった。

地図の通り、産婆の看板のところで円タクをおり、仙吉を先頭に、たみ、十八になる長女のさと子、すこし遅れて仙吉の父初太郎が、それぞれトランクや籐のバスケットを手に路地を入ったところで見つけたのである。たみは疲れが出たのか、汽車の中からひどく大儀そうにしていたのに、こういうことには目が早かった。

「お父さん、ほら」

仙吉は門倉とあい年である。門倉は^{*3}羽左衛門をもっとイバタ臭くしたようなと言われる美男で、銀座を歩けば女は一人残らず振り返るといわれたが、仙吉のほうは、ただの一人も振り返らない男だった。見映えのしない外見に重しをつけようというつもりか、鼻の下にチョビひげを蓄えている。その分だけ分別くさく見えた。

「何様じゃあるまいし、馬鹿でかい表札出しやがって」

嬉しい時、まず怒ってみせるのが^②仙吉の癖である。

「三十円にしちやいいうちじゃないの」

「そりや奴がめつたんだ。間違いないよ」

玄関のすぐ横手に大きな木蓮がある。二つ三つ蕾がふくらんで、暗い紫色の艶のいい舌をのぞかせている。木蓮が開くと桜が咲いてお花見になるのだが、東京は高松より風が冷たい。さと子は首をへⅢ。

仙吉とたみは、玄関の前で待っていた。さと子は、六年前のことを思い出した。仙吉から、東京の本社へ転勤になり、今日のように門倉が借家の世話をしてくれたときのことである。あのときは、一家四人が着いたところできなり玄関の戸があいた。ばあと、かくれん坊の子供が出てくるように門倉の笑顔が出迎えた。今度もそうかしら、と仙吉に言う、

「そうだよ。なかへ入ると火鉢に火はおこってる。座布団はならんで。風呂は沸いている。びっくりするおれたちの顔見たくてさ」

^③自分のことのように得意になった。

「それで門倉さん、駅に迎えにこないのね」

たみも相鎚をうつたが、門倉は出てこなかった。

玄関の戸は、仙吉が手をかけると、するりと開いた。
なかは仙吉の言ったとおりだった。

青畳。いま貼りがえしたばかりの糊の匂いのしそうな障子と襖のまんなかに、炭火をいけた瀬戸の火鉢があった。鉄瓶がたぎり、茶の道具が揃っていた。炭取りには炭があり、部屋の間には新しい座布団が積んである。

仙吉は、床の間の籠盛りを見つけた。へⅡ、伊勢海老、さざえが笹の葉を敷いてならば、隣りに「祝栄転」の熨斗紙をつけた一升瓶が立っていた。

「相変らず下手糞だね。字だけはおれのほうがうわてだな」

鼻のつまったようなくぐもり声で仙吉は笑った。

押入れをあけたたみが声を立てた。

「お父さん、夜具布団、絹布よ」

「チツキが着くまでなんだから、貸布団でいいじゃないか。無駄遣いしやがって」

下の段には、覆いをかけた枕や寝巻まで入っていた。

間取りも申し分なかった。

茶の間が六畳、客間が八畳。つづいて夫婦の寝間の六畳。はばかりに近い玄関脇の四畳半に、煙草盆の用意があるのは、初太郎の部屋のつもりであろう。老父と息子の折り合いが悪く、口も利かない間柄を門倉はのみ込んでいて、夫婦の部屋と離れたところに心づもりしたのである。二階は四畳半と納戸兼捨部屋の三畳である。四畳半には、ここはさと子ちゃんの部屋だというように、一輪差しにへⅣの花があった。

風呂場のガラスが湯気で曇っている。

仙吉は風呂桶の蓋を取り、着衣のまま手を突っ込んで、そのまま動かなかった。湯加減を見ているだけではないことは、^④さと子にもよく判った。

(向田邦子『あ・うん』より)

【注】 *1 チツキ……鉄道で送る荷物。

*2 円タク……「一円タクシー」の略。昭和初期の大都市で、市内を一円均一の料金で走っていた。

*3 羽左衛門……美形で知られた歌舞伎役者、十五代目市村羽左衛門（一八七四～一九四五）。

問二 へⅠへⅣを補う言葉として最もふさわしいものを、次の1～5よりそれぞれ選び、数字で答えなさい。本文には
 へⅡへが二か所ありますが、両方に同じ言葉が入ります。

Ⅰ					Ⅱ					Ⅲ					Ⅳ				
5	4	3	2	1						5	4	3	2	1					
針目	糸目	役目	人目	筋目						鮎 <small>あゆ</small>	鯉 <small>お</small>	鯛 <small>か</small>	鯛 <small>た</small>	鯛 <small>さ</small>	鯛 <small>は</small>				
										つな	そろ	のぼ	すく	かし					
										げた	えた	した	めた	げた					
															5	4	3	2	1
															桃	桔梗 <small>ききよう</small>	山茶花 <small>さざんか</small>	朝顔 <small>あさご</small>	桜

問二 〰〰〰ア・イの意味として最もふさわしいものを、次の1～5よりそれぞれ選び、数字で答えなさい。

ア キナ臭い					イ バタ臭く				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
秘密がありそうだ	ぼろを出しそうだ	勝ち目がありそうだ	戦争が起こりそうだ	景気が良さそうだ	現代的に	西洋的に	都会的に	牧歌的に	野心的に

問三 ①「今日このときのためにあったようなものだった」について、水田一家が高松にいた三年間を、「門倉」がどのよう
 に過ごしてきたということですか。「門倉」の気持ちが変わるように、五十字以内で説明しなさい。

問四 —— ②「仙吉の癖」について、この癖が表れている発言を本文より二か所選び、それぞれの最初の五字をぬき出しなさい。
かぎかつこは解答に含めず、文字だけを書くこと。

問五 —— ③「自分のことのように得意になった」について、「仙吉」は、誰の、どういう様子を誇らしく思っているのですか。
二十字以内で説明しなさい。

問六 —— ④「さと子にもよく判った」について、ということがわかったのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選
び、記号で答えなさい。

ア 門倉のおじさんが、今回は東京駅に迎えに来なかっただけでなく、新しい家にも姿を見せないだろう、ということ。
イ 門倉のおじさんが、さと子たちを驚かせようとどこにかくれて、姿を現す機会をうかがっている、ということ。
ウ 父の仙吉が、自分にはとてもできない贅沢な用意をした門倉のおじさんに、少し気を悪くしている、ということ。
エ 父の仙吉が、門倉のおじさんからの心づくしに、いつもながら言葉にならない感謝をかみしめている、ということ。
オ 父の仙吉が、初太郎と話もしないまま同じ家で暮らしてゆくことを、改めて気づまりに感じている、ということ。

国語の問題は、次のページに続きます。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

そのとき、私にはとても珍めずしいことだったが、岩手の花巻でタクシーに乗っていた。
タクシーに乗るのが① ① どうして珍しいことなのか？

私は浪費家でもないが、吝りんしん家、すなわちケチというのでもないと思う。A サイフというものを持ったことのない私は、あればあるだけの金をポケットに突っ込み、ほとんど無造作に使い切ってしまう。要するに金の使い方に関してはかなりヘーI 方なのだ。しかし、タクシーに使う金に関してだけは別である。臆おく病びょう、と言ってもいい。

もつとも、つい最近まで、銀座や新宿の酒場で夜遅くまで飲み、家にタクシーで帰るなどということを日常的に続けていたが、そのときのタクシー代をもつたいたいと思っただけではない。臆病ちゆうちやうになっってしまうのは、旅先に限るのだ。旅に出ると、ついタクシーを使うのを躊躇ちゆうちやうしてしまう。

その臆病さは若い頃の貧乏旅行の体験に根差している。一日でも長く旅を続けるため、一ドル、いや一セントさえもヘーII 使わなくてはならなかった。そのような貧乏旅行では、タクシーを使うなどということはよほどのことがないかぎりありえなかった。常に歩くか、公共の交通機関を使うかして、金を倅約けんぎやくしつづけていた。

それから年月が過ぎ、いくらか旅費に余裕が持てるようになって、旅に出ると、どうしても金を倅約したくなってしまう。タクシーに乗る前に、まずは歩こうと考え、次にバスはないかと探してしまう。

その私が、花巻においてタクシーに乗るというだけでなく、一時間も借り切るなどというかつてないことをしたのはどうしてか。花巻で生まれ育った宮沢賢治にゆかりの場所を短時間で巡ってもらおうとしていたのだ。

実は、私はつい最近まで、ほとんど② ② 宮沢賢治を読んだことがなかった。宮沢賢治に独特な言葉遣づかいがなんとなく苦手だったのだ。ところが、最近、盛岡に用事ができ、二、三日滞在しては帰ってくるということを繰り返すようになった。用事そのものは午後の早い時間で終わるため、夕方以降が暇ひまになる。その時間をぼんやり過ごすようになって、宮沢賢治の作品を読むようになった。本は、その舞台になった土地で読むと、不思議なほど理解が深くなるということがある。

盛岡は宮沢賢治の学びの土地だが、ある日の午後、ふと、宮沢賢治の生地である花巻に行ってみようかなという気持が起きた。

③花巻駅に着くとタクシーを呼んだ。私の若い友人が、花巻には宮沢賢治ゆかりの場所を巡ってくれるタクシーがあると話していたのを思い出したからだ。私は旅先におけるタクシー恐怖症を克服すべく、まさに三百三十八メートルのマカオタワーの上からバンジージャンプでもするような気持で、タクシーの時間借りをすることにした。

来てくれたタクシーの運転手は、意外にも初老に近い女性で、宮沢賢治にまつわる「名所」に手際よく連れて行ってくれてはガイドのような名調子で説明してくれる。おかげで花巻という地名の由来も、花巻における宮沢という名の家の重みも、よくわかってきた。しかし、こういう旅の仕方に慣れていない私には、なんとなく面白みがなく、やはり自分の足で歩いたり、バスに乗ったりしなくては駄目なのだなと後悔しかかっていた。

女性の運転手は、最後に、少し遠回りをして県立花巻農業高校に案内してくれた。そこはかつて宮沢賢治が教鞭きょうべんを執っていた花巻農学校のBコウシンの学校だが、彼女が案内してくれたのは、その校庭の片隅にCイチクされた宮沢賢治の住居だった。

その家では、宮沢賢治の最愛の妹であり、最大の理解者でもあった妹のトシが、死ぬ前にも滞在して結核の療養りょうようをしていたという。宮沢賢治はトシが息を引き取ると、それを深く悲しみ、「永訣えいけつの朝」という詩を書く。

あああのとぎされた病室の

くらいびようぶやかやのなかに

④やさしくあおじろく燃えている

わたくしのけなげないもうとよ

私は夕暮れの淡いDヨウコウに照らされた古い民家の前にたたずみながら、これが宮沢賢治が住んでいた家だったのか、これがトシを看病していた家だったのかと、心の奥でひとりつぶやきつづけていた。

たぶん、ひとりで気ままに動いていれば、観光客にとってあまりアクセスがいいとは言えないこの地に来ることはなかっただろう。貸し切りのタクシーに乗って運転手に行き先をEユダねるという、私にとってⅢの行動を取ったおかげでここに来ることができた。

私は、その「ちょっとした贅沢ぜいたく」が導いてくれた思いがけない風景との遭遇そうぐうに、⑤感謝したくなった。

(沢木耕太郎『旅のつばくろ』より)

問五 ——— ②「宮沢賢治」の作品としてあてはまらないものを、次のア～クより二つ選び、記号を五十音順に並べなさい。

ア	ゼロ弾きのゴシユ	イ	やまなし	ウ	風の又三郎	エ	手袋 <small>てぶくろ</small> を買いに
オ	どんぐりと山猫	カ	さんしょうお 山椒魚	キ	よだかの星	ク	銀河鉄道の夜

問六 ——— ③「花巻駅に着く」について、このような行動を起こした「私」の考えの変化を、解答用紙に示された「生地である花巻」にも行こうとふと思いついた」という末尾に続くように、五十文字以内で説明しなさい。

問七 ——— ④「やさしくあおじろく燃えている」という表現は、どのような様子を表していますか。次に示す、「永訣の朝」の一部（仮名づかいは原文のままにしています）をふまえて考え、最もふさわしいものを、後のア～オより選び、記号で答えなさい。

ああ *₁とし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(*₂ あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

【注】

*₁ トシのこと。

*₂ 「雨雪をとつてきてください」という意味の方言。

ア トシのはかない魂^{たましい}が、今にも天に昇ろうとしている様子。
イ 亡くなってしまったトシが、火葬^{かそう}されて天に昇ってゆく様子。
ウ トシの病室を、ろうそくの火がうす明るく照らしている様子。
エ 賢治がトシのけなげさを受け止め、じっと見ている様子。
オ トシが、命尽きるまで一生懸命に生きようとしている様子。

問八 —— ⑤「感謝しなくなった」について、この時「私」は、どのような気持ちでいますか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 旅先でタクシーを使うことに臆病になったままでは訪ねるはずのなかった場所に、今回の旅では行くことができた。そしてその場所は、かつて宮沢賢治が最愛の妹トシを看病していた家だった。

イ 宮沢賢治が妹のトシを看病していたという家を訪ねることができた。またその家は、観光客にとつてあまりアクセスが良好とは言えない場所にあるため、気ままに動いていれば行くことはなかっただろう。

ウ 徒歩やバスを利用するいつもの旅だと訪れるはずのなかった場所に、今回はタクシーを使ったことで訪問できた。そして偶然^{ぐうぜん}にも感動的な風景と出会えたことに、ありがたさを感じずにはいられなかった。

エ はじめは、自分の足で歩いたりバスに乗ったりしなければ、旅の楽しさを味わえないと思っていた。タクシーを使った今回の旅は、そのような思いを見事に打破してくれて、すがすがしい気分になった。

オ 初老に近い女性が、タクシーで宮沢賢治にまつわる名所を案内してくれた。そして最後に訪ねた場所は、宮沢賢治のかつての住居であり、穴場の風景を見せてくれた運転手にありがとうと伝えたい気持ちになった。

国語の問題は、次のページに続きます。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「書く」ことについては、実は、^①誤解^{ミソカ}をしている人がたくさんいます。それは大別すると、二つあります。

誤解の一つは、テーマが先になければならないというもの。「動機があるから書く」とか、「頭の中に何かがあるから書く」「目的があつて書く」と思いがちですが、そうではありません。

「よし、書こう」

そう思った瞬間にペンを持ってノートに向かう。そうすると、書くことが自分の中から泉のようにどんどんわき出してきました。

事前にテーマを決めてから書き始めたほうが効率的だと思われがちですが、それは違います。テーマを決めようとすると、「これがいい」「いや、こっちがいい」と思考が堂々巡りになりがちです。へーⅠ下調べをしたり本を読んだりして、いたずらに時間を浪費してしまいます。おそらくこういう経験をした人は多いのではないのでしょうか。

かつて僕がケンブリッジでお世話になったホラス・バーロー教授は、なかなか期限を過ぎても論文を書き上げられない学生に対して、僕の見ている前で「なぜ提出しないんだ！」と催促^{さいそく}したことがあります。その学生が「何を書いたらいいのかわからない」と正直に答えたところ、教授の答えはこうでした。

「まず書いてみなさい。そうすれば、君が何を考えているかわかるから」

多くの人は、まず書きたいことが最初にあつて、それが決まってしまうという行為に及ぶのだと思っています。まず初めに書きたい内容がなければ、何も書けないと思っていますが、事実はその逆です。

人間は、自分が考えていることをすべて把握^{はあく}しているわけではありません。^②自分が何を本当は考えているかは、書いてみて初めてわかることなのです。

何も書くことが思いつかないけれど、ペンを持ってみたら、スラスラと書いてしまったなんてことは誰でも一度や二度は経験しているでしょう。それは、無意識の泉に沈んでいる思いが、書くという作業を通して浮かび上がってくるからです。

僕は「*¹ note」に毎日記事を書いています。その瞬間まで、何を書くのか決めていません。その日の気分にならせて、直前に「これでいいこう」と思ったことを書くようにしています。

パソコンのキーボードにタイプした瞬間に脳の中にテーマが浮かんできて、それについて一気呵成^{かせい}に書いていきます。テーマがあるから書くのではなく、「書くからテーマが見つかる」のです。

こんなことをいうと、「茂木さんだから、^③そんなことができるんですよ」という声がかかるのは承知しています。「私には無理」と思っている人は多いですが、これは誰にもできることです。決して無理ではありません。

書くという行動は、自分の「無意識にアクセスする」ことです。無意識の中では、「書く準備」がちゃんとできています。

無意識の中では、これまでに得た知識とか経験が腐葉土^{ふようど}のように積み重なっています。どんな人でも一〇年たったら一〇年、二〇年たったら二〇年、三〇年たったら三〇年分の腐葉土が貯^たまっています。

ただし、積み重ねた知識や経験が勝手に芽を出すことはありません。へⅡ～きっかけは必要で、それが「書く」ことです。

「書く」ことで、脳に新たな回路がつくられます。書かなければ、回路がつくられないし無意識にアクセスすることもできません。

よく「クリエイターにとって一番必要なのは締め切りだ」と言われますが、それは「きっかけがないと書けない」ことを逆説的に示しています。

ロシア文学者の亀山郁夫^{いくお}さんによると、文豪^{ぶんこう}フォードル・ドストエフスキーの『罪と罰』以降の作品『白痴』や『悪霊』^{あくりよう}『カラマゾフの兄弟』などはすべて口述だそうです。ギャンブルで背負った借金を返すために手っ取り早く稼^{かせ}ごうとして、自分がしゃべったものをまとめてもらって小説として世に出した経緯があります。お金のために早く本を出さないといけないから、切羽詰まって自分の中にあるものを出したところ、傑作が生まれたというのは、示唆^{しそ}に富みます。

へⅢ～ドストエフスキーがじっくり時間をかけて構想を考えてから『罪と罰』を書いていたら……。もっと素晴らしい小説が生まれた可能性もありますが、その半面、時間がかかりすぎて量産できず、『カラマゾフの兄弟』に至るまでの傑作の数々が世に出なかったことも考えられます。

ドストエフスキーの場合、「書かなければ（出さなければ）いけない」というプレッシャーがきっかけになって、自分の中に積み上げてきたものがほとぼしるようにわき出してきたのは、事実です。苦しまぎれでつくったりしたもの、必ずしもクオリティーが低いということはありません。

もう一つの誤解は、書かれたものが最終形でなければならないというもの。書く以上は一点のミスもない完成形に仕上げなければならないと思います。書いたものが、叩^{たた}き台とか、^④肩肘張^{かたひじ}ることは不要です。

書いたものは、叩^{たた}き台とか、*²パイロット版。極端なことを言うと、未完成でも構わない。そんなふうに気軽に考えたほうが、心理的ハードルがグッと下がります。

書くということは、自分の無意識の中にある何かを取り出すことです。その出てきたものが「こんなことを考えていたんだ」という、自分でも意識していなかったことであれば、それが新しい視点になることもあります。思いついたことをパパッと紙切れにメモするだけでもいいです。へⅣ～書いたものが叩^{たた}き台やパイロット版であるほうが、のちのちクオリティーを高めていける「のびしろ」が

あります。

「書く」ことはあくまでもきっかけ。また未完成でもいい。この二つを理解すると、書くことに対する意識が大きく変わるはずです。

(茂木健一郎『「書く」習慣で脳は本気になる』より)

【注】

- * 1 note……………記事の投稿や購読ができる、インターネット上のサービス。
- * 2 パイロット版…………一般公開に先立って作られるもの。

問一 へ I へⅡ へⅢ へⅣ へを補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～コより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア	まだ	イ	むしろ	ウ	まさか	エ	やはり	オ	どうにか
カ	もし	キ	まるで	ク	すでに	ケ	たとえ	コ	あるいは

問二 —— ①「誤解」とは、文章を書くことについての、どういう誤解ですか。具体的な内容を、三十字以内で説明しなさい。

問三 ―― ②「自分が何を本当は考えているかは、書いてみて初めてわかる」といえるのはなぜですか。最もふさわしい理由を、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 無意識の知識や経験にアクセスするためには、書くことと脳をつなげる回路が必要だから。
イ 文字を見たときに目と脳の回路が完成し、無意識の中にある知識や経験を自覚できるから。
ウ 何かを書くことが、無意識にある知識や経験と脳をつなげるための回路を作り出すから。
エ 口述では、無意識にある知識や経験を表現するための回路を作り出すことができないから。
オ 知識や経験の泉に沈んでいる無意識が、書くという作業を通して脳内に伝わってくるから。

問四 ―― ③「そんなこと」とは、どういうことですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 ―― ④「肩肘張ることは不要です」について、なぜですか。最もふさわしい理由を、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 最初からテーマを決めて書き始めると、自分が無意識のうちに考えていたことに気づくきっかけを失ってしまうから。
イ 最終形を意識しながら書くことで、無意識にある知識や経験を新しい視点とし、のびしろのある文章を書けるから。
ウ 未完成なものを前提にして書くことで、心理的に追いつめられることがなくなり、かえってよい文章が生まれるから。
エ 叩き台でよいという意識を持った方が、無意識から着想を得ることができ、よりよい文章を書くことにつながるから。
オ パイロット版を作るつもりで書けば、心に余裕が生まれてまちがいが少なくなり、後々よいものが完成するから。

問六 作者はドストエフスキーの例によって、読者にどういうことを伝えようとしていますか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 文章は、書きたいことがあるから書けるのではなく、書かざるを得ないから書ける、ということ。
- イ 文学者ですらきっかけがないと書けないのだから、素人^{しろと}にはより強いきっかけが必要だ、ということ。
- ウ じっくりと構想を練り細部まで完成させていく余裕のない方が、かえって良い作品になる、ということ。
- エ 後世に残る名作をいくつも生み出すには、切羽詰まった特殊な状況がなければならぬ、ということ。
- オ どんなに望ましくない状況にも、当人の思いも寄らない成功の可能性がひそんでいる、ということ。

